

親孝行休暇、 こども成長記念休暇



管理部

釜下 奈緒 さん

企業プロフィール

- 事業内容: 外構資材のインターネット販売とお庭施工事業
- 従業員数: 121名(2014年10月1日現在)
- 年次有給休暇の取得率: 52.8%
- 年間休日数: 119日
- URL: <https://www.d-a.co.jp/>

休む日を宣言させて 無理なく取れるよう調整

実践!

こうすればできる!
こうすればのびる!

- ① 休む日を宣言させて意識させる
- ② 休みを年間スケジュールに組み込む
- ③ 「休んでよかった」ことを全員で共有

親に感謝するための「親孝行休暇」

「親孝行休暇」は2008年に制度化した、年次有給休暇以外に取れる有給の特別休暇です。正社員、パートなど全従業員が申請なしに年間1日取得できます。ただしユニークな条件があります。“本当に親孝行をすること”と、その内容を“朝礼で報告すること”です。「両親を連れて旅行しました」「母親に感謝するため、家事を代わりにやりました」など、さまざまな親孝行が朝礼で報告されると「職場がほっこりと温かくなる」と好評です。

「親孝行休暇」の取得率は現在ほぼ100%ですが、当初はこれほど高くありませんでした。制度化しても、実際には仕事の調整がつかない人や、「親孝行するため休みます」とは言いだしにくいと感じる人もいました。

そこで2014年4月から「私は○月○日に親孝行休暇を取得します」と取得日を“宣言”してもらおうようにしました。各部門長がヒアリングし、年間の業務スケ

ジュールに「親孝行休暇」を組み込みます。これにより全社的に休暇取得日を調整できるようになりました。以前は「部署で何人もの休みが重なってしまい結果的に取得できなかった」といった声もありましたが、予め宣言することにより解消されたのです。



晴れの日を祝う「こども成長記念休暇」

「こども成長記念休暇」は、幼稚園から中学校に通う子どもの入学式と卒業式という“晴れの日”にあわせて取れる有給の特別休暇です。全従業員対象で、子ども1人につき年間1日取得できます。2012年度から制度化し、取得率はほぼ100%です。特別な条件はなく、報告も義務付けてはいないのですが、「○○さんのお子さんも中学生か」など、同学年の子を持つ親として取得者

同士で話が弾み、部署を超えてお互いに助け合うといったムードが生まれています。卒業式、入学式は3月と4月に集中し、当社の業務の繁忙期とも重なります。そんなときでも対象者が休みを取れているのは、他の社員の協力があってこそ。助け合う雰囲気が社風として根付いてきたのだと感じています。

「休んでよかった」という連鎖をつくる

「親孝行休暇」「こども成長記念休暇」ともに制度として定着した理由は、休暇を取ったことで親やこども、家族が「こんなに喜んでくれた」と、取得者の口から周囲の従業員が直接聞くことができることが大きいと感じます。仲間から嬉しい報告を聞くと、その嬉しさを今度は

自分が味わって、また仲間に報告したくなる。その連鎖反応があるから、2つの休暇制度がきちんと定着したのだと思います。



制度活用事例

「親孝行休暇」で父親をかつての思い出の店に

前職の金融関連の仕事は多忙で、休みもままならない生活でした。仕事も大切ですが家族との時間も大切と転職を考えていたときに、人材紹介会社を通じて当社を知りました。会社の説明資料で「親孝行休暇」の記載を見て、「面白い休暇制度がある会社だな」と思ったことを覚えています。入社3年目ですが、親孝行休暇は毎年使っています。

最初は、何をすれば親が喜ぶのかわからないし、あらたまって聞くのも照れくさかったですね。それでも、「今度、休みをとるから親父のために何かプレゼントをしたい」と切り出したら、とても喜んでくれました。結局、父親が20年ほど前に食べて、今でも「その味が忘れられない」と口にしていた鴨鍋を家族で食べにいくことにしました。父も母も、妻も子どももみんなが笑顔になってくれて、心から「休みをとって良かった」と思えました。

卒園式で羨ましがられた「こども成長記念休暇」

入社後に「こども成長記念休暇」も制度化され、2014年3月に二男の幼稚園の卒園式に出席するために利用しました。卒園式は平日で、最初は「休みを取ってまで参加することはないか」とか「父親が参加したら目立つだろうな」などと考え、躊躇していました。ところが、実際に参加してみると、父親の姿も多く見られました。同じ年齢の子を持つ親同士ということで話をしてみたら、みなさんは年次有給休暇を使つての参加でした。

私が「こども成長記念休暇」の話をする、とても羨ましがられました。私も年次有給休暇を取らなくてはならないなら、卒園式に参加したかどうかはわかりません。「こども成長記念休暇」という名前の休暇制度だからこそ利用しようと思ったのです。

「親孝行休暇」とともに2つの休暇制度を利用しましたが、どちらの場合も職場の同僚が当たり前のように休みを取ることを受け入れてくれたので、とてもありがたかったですね。周囲に気を遣ったり、仕事に支障をきたさないように段取りしたりする必要はほとんどなく、「大丈夫、あとはみんなのできるから」と。そのためか、休んでみると、改めて職場のみんなに支えられて仕事ができていることを実感しました。もちろん、そう感じたことは素直に朝礼で発表しました。私が休みをとって味わった喜びや感謝の気持ちが伝わって、それが連鎖反応のように広がり、みんなが働きながら幸せになれるといいと思っています。



エクスショップ事業部
営業課長

小林 昌裕 さん